

Recommend

福島建次郎 先生が薦める、この4冊

獣医療のミライ

11

インタビューシリーズ



福島建次郎
Kenjiro Fukushima

米国獣医内科学専門医(小動物内科)
修士(毒性学、臨床科学)、博士(獣医学)

経歴

- 2006年 鹿児島大学 農学部獣医学科 卒業
- 2006~2008年 東京大学動物医療センター 内科系診療科 研修医
- 2008~2009年 東京大学動物医療センター 獣医内科学研究室 教務補佐員
- 2009~2017年 東京大学動物医療センター 第2内科 特任助教
- 2017年 東京大学 大学院 博士号(獣医学)取得
- 2017~2018年 コロラド州立大学 大学院 放射線環境科学学部 修士号取得(毒性学)
- 2018~2019年 コロラド州立大学 小動物内科専科インターン
- 2019~2022年 コロラド州立大学 小動物内科レジデント修了
- 2019~2022年 コロラド州立大学 大学院 臨床科学学部 修士号取得(臨床科学)
米国獣医内科学専門医(小動物内科)取得

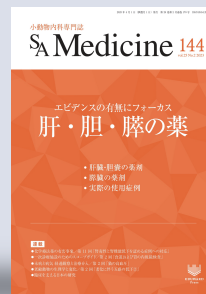


CLINIC NOTE

210号 (2023年1月号) 福島先生ご監修

肝疾患の勤どころ
~早期発見、早期治療に導く
アプローチ~

獣医学の“標準診療”を学ぶ総合情報誌
月刊 A4判 112頁
定価: 3,353円(税込)



SA Medicine

144号 (2023年4月号) 福島先生ご執筆

エビデンスの有無にフォーカス
肝・胆・膵の薬

小動物内科専門誌
隔月刊 A4判 96頁
定価: 4,505円(税込)



VETERINARY BOARD

45号 (2023年1月号)

門脈体循環シャント
~外科と内科の選択肢~

臨床の選択肢を広げるケーススタディマガジン
月刊 A4判 112頁
定価: 4,400円(税込)



VETERINARY BOARD

49号 (2023年5月号)

胆嚢疾患に対する
診断・治療の再考

臨床の選択肢を広げるケーススタディマガジン
月刊 A4判 96頁
定価: 4,400円(税込)

詳しくはEDUWARD Press オンライン「獣医療のミライ」特設ページ
(https://eduward.online/lp_future_of_veterinary_medicine)をご確認ください。



EDUWARD Press
オンラインサイト <https://eduward.online>



受注専用 TEL. ☎0120-80-1906 受付:平日9:00~17:00
受注専用 FAX. ☎0120-80-1872 受付:年中無休・24時間受付

DM : 70001929



福島建次郎

どうぶつの総合病院 専門医療&救急センター
内科主任

全身を総合的に診る、真の内科医を育成
アジアと欧米の研究をつなぐ架け橋に

鹿兒大から東大へ。獣医内科学との出会い

—まず、先生が獣医師になろうと思われたきっかけから、お聞かせください。

母に聞くと、小学校3年生あたりの文集には、「将来は獣医さんになりたい」と書いていたようです。でも、私自身はあまり覚えていないんですよ(笑)。思い出せるのは、小学校低学年の頃、通学路で捨て犬を拾ってきた時のこと。父をなんとか説得して、譲渡先が見つかるまで預かれるようになったものの、肝心の子犬の世話は母と姉に任せきりで……。母と姉に「責任感がない」と厳しく叱られてしまったのをよく覚えています。

—高校卒業後は鹿兒島大学の農学部獣医学科に進まれました。大学ではどの研究室に？

内科学研究室で学び、分子細胞生物学的なアプローチを用いた腫瘍の研究に取り組んでいました。日本獣医内科学アカデミーなどで研究発表の機会もいただき、その時に会った東京大学の研修医の先生の勧めや、より幅広い視点で臨床をみたいという考えもあって、卒業後は東京大学の研修医の道を選ぶことにしたんです。

臨床教員として大学に残ってからは、肝胆膵や免疫介在性疾患の臨床研究、教育が中心に。大野耕一先生、中島 亘先生という優秀な先生方にご指導いただき、研究者、教育者として充実した日々を過ごすことができました。

理論ベースの思考力を鍛え、全身を総合的に診る力を磨く

—福島先生は2017年から5年間にわたり、JFVSS(日本獣医学専門医奨学基金)の第3期生として、コロラド州立大学に留学されていました。留学を決意されたきっかけは？

留学の約1年前、大学病院の臨床で、深刻な嚥下障害の症例を担当した時の経験が大きいと思います。文献情報も、できる検査も限られていて、ものすごく悩んでいました。そんな折、ちょうど訪米の機会があり、消化器疾患の研究で有名なStanley Marks教授(カリフォルニア大学デービス校)の講演を聞いたんです。その講演は、数百例の嚥下障害の犬について、X線透視検査の結果をサイエンティフィックに分析するという内容。その規模にも、レ



ベルの高さにも、大きな衝撃を受けました。「今まさに悩んでいる症例も、こういう先生に巡り合えたら適切な診断、治療につなげられるのに…。私が診ているばかりに、長く苦しませてしまっている」。力不足を痛感させられました。

—留学先のコロラド州立大学のレジデントプログラムでは、どのような部分に魅力を感じられましたか？

米国獣医内科専門医の先生方に接する中で、最も大きな感銘を受けたのは、内科医の本質、いわば「動物の全身を総合的に診ることができる能力」です。先生方は、呼吸器や腎泌尿器、肝胆道系など全ての内科の診療分野でハイレベルな知識や臨床経験をもっておられます。だからこそ、身体のある部位で問題を生じさせている事象が、別の部位にどんな影響を与えるかが見えてくる。そうした身体の中の有機的なつながりを、科学的にかつ理論的に読み解くことができ初めて、その症例に起こっている現象や疾患の成り立ちを真に理解し、より正確な診断、治療につなげられるのだと思います。

—身近に目指すべき存在がいるというのは、学びががありますね。

はい。専門医に直接相談できるレジデントラウンドでは、毎週、専門分野が異なる先生方に、多様な角度からのアドバイスをいただけます。毎回、知識の深さ、幅広さに感服するばかりでしたし、一言たりとも聞き漏らせないほど、得難い経験になりました。

米国専門医と同等レベルの教育環境を国内に

—米国のレジデントプログラムにおいては、臨床研究と並行してインターンや学生の教育にも従事しておられたそうですね。指導に当たって、特に注意されていた部分はありますか？

まず、それぞれの症例の病歴や検査所見を、病態生理学や薬理学などの理論に落とし込んで解説することです。その上で、「今までの経過からどんな鑑別が考えられますか?」、「どういう検査が必要ですか?」など、臨床の現場に戻して考えてもらうようにすると、一つの現象や疾患に対する理解の深さが全く変わってきます。面倒な作業に思われるかもしれませんが、これを徹底して繰り返すことで知識が沈着するのです。

—帰国後の所属先であるどうぶつ総合病院には、米国の専門医資格を持つ獣医師が、福島先生を含めて8人も在籍しておられるとか。国内では稀なケースですね。

米国専門医同士が自由にディスカッションできる場であることが、この病院を選んだ理由でもありました。若い先生方に対して、専門医が集まるこの環境で、できるだけ米国のレジデントプログラムに近い形でトレーニングを積んでいけるように導いていきたいですね。上下関係なくディスカッションでき、臨床医として共に切磋琢磨できる環境を整えられれば嬉しいです。

—最後に、日本の獣医療全体についての今後の展望をお願いします。

甲状腺機能亢進症に対して、獣医療でも海外と同じく放射線ヨウ素を用いた治療ができるよう、さまざまな先生方の協力を仰ぎつつ、法改正を含めた取り組みを進めていきたいと考えています。その他、コロラド州立大学の後輩が進めている猫好酸球性硬化性過形成(GESF)の症例研究に参加し、2023年のACVIMにて発表予定です。GESFは珍しい疾患ですから、日本からの症例もとりまとめて海外のチームと共に発表することで、海外からの注目度も高まるのではないかと考えています。そうやって、私が日本と海外の研究者をつなぐ架け橋の一人になれば嬉しいです。

ACVIMやECVIMの会場で、広域のメタ解析として並ぶのは、現時点では米国とヨーロッパのデータだけ。そこに、アジアのデータが加わるよう、流れを大きく変えていきたいと思っています。

